

意匠知財の地殻変動を読み解く

PIFC 2025/2026 比較分析から見た
「デザイン×経営」の現在地

Date: 2026.09.20

Subject: Patent Information Fair & Conference (PIFC) Analysis

Focus: Design IP & Strategic Management Shift

[CONFIDENTIAL / STRATEGIC BRIEFING]

3つの核心：PIFCから読み解く意匠領域のシフト



全体の主役は 「生成AI×特許」

特許中心から「知財総合展」への移行が進み、出展規模は史上最大へ拡大。しかし、技術的ブレイクスルーの主役は圧倒的に「生成AI×特許調査・分析」が占めている。



意匠の「実務」から 「経営」への昇華

意匠は実務ツールとしての存在感は薄いものの、「デザイン経営」「無形資産」という経営・ブランドの文脈へと議論のレイヤーが明確に移行している。



インフラとグローバル 制度の地殻変動

Graphic Image Park (Grip)の終了や、EU意匠制度改革（第2フェーズ）など、展示会の表層には現れない実務環境の大きな変化が水面下で進行している。

PIFCのマクロ進化と「意匠」の相対的位置

KPI DASHBOARD



出展規模

史上最大規模

158社 (2025) → 171社/367小間 (2026)



来場者数

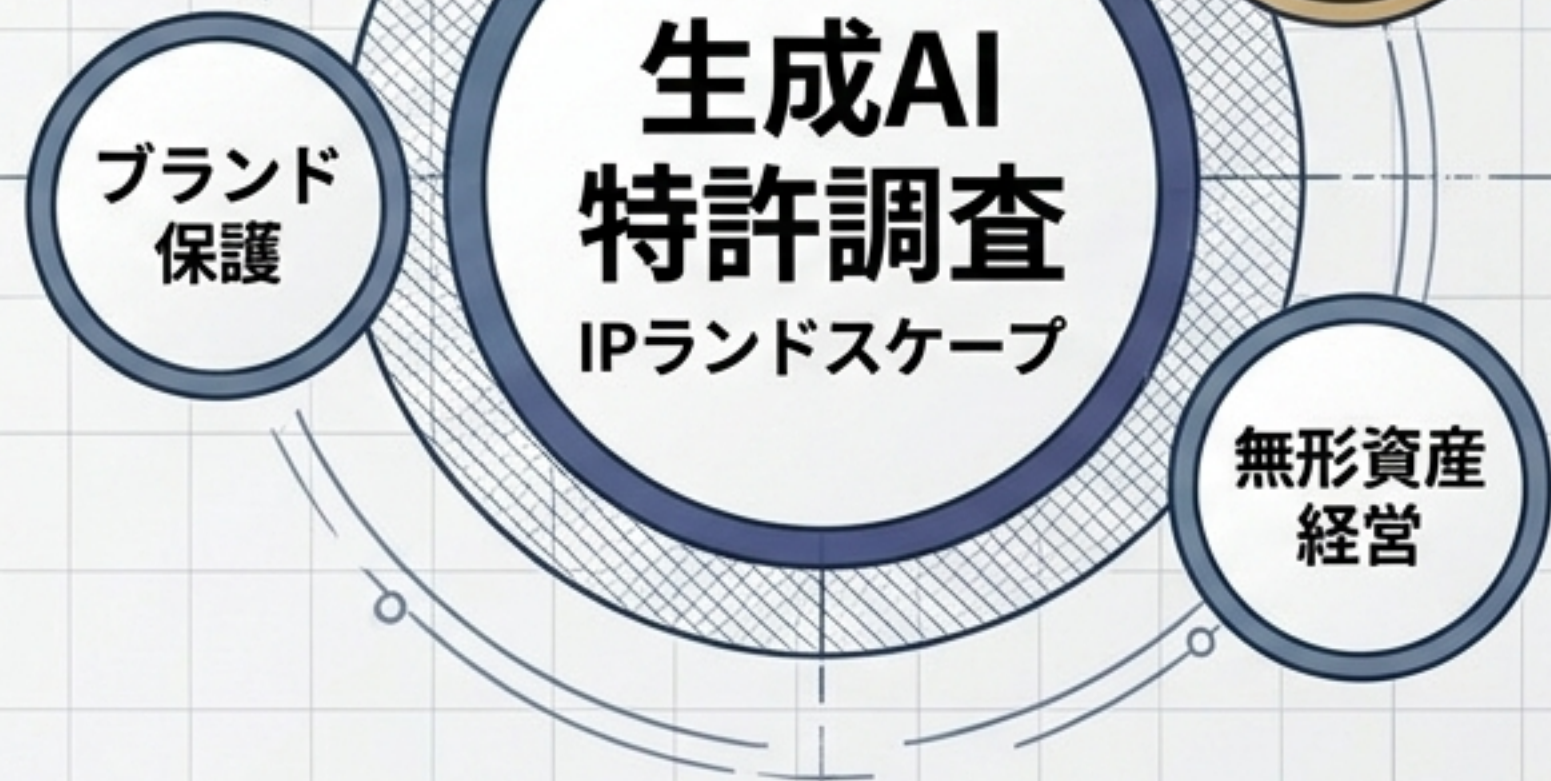
15,207名 (2025) → 15,502名 (2026)



プレゼン

86テーマ (2025) → 108テーマ (2026)

THEME RADAR



フェアの主役は疑いようもなく「生成AI」。
意匠は独立カテゴリとしては未だ限定的。

比較マトリクス：意匠関連シグナルの変化（2025 vs 2026）

観点	2025	2026	変化（Delta）
意匠・デザイン主題の講演	中核1本（特別フォーラム⑤）	2本（特別講演②、特別フォーラム）	[微増]
周辺領域（商標・ブランド）講演	2本	商標系フォーラム1本＋出展者プレゼン複数	[やや増加]
意匠専用の展示・新製品	確認できず	確認できず	[変化なし]
デザイン系団体の関与	デザイン経営推進機構がフォーラム企画	公益財団法人日本デザイン振興会が後援に参加	[関与が拡大]

「意匠単体のツール」の展示は皆無だが、「デザイン団体」のバックアップと「講演数」には確かな上昇気流が確認できる。

意匠知財に起きている「二極構造」のパラドックス

経営・戦略レイヤー（上昇）

デザイン経営・ブランド・無形資産

「技術と意匠を未来につなぐ自社商品開発
(セメントプロデュースデザイン 金谷勉氏)」
「無形裁判を横断的に捉える特別フォーラム」。
大企業から中小企業へと議論の層が拡大。

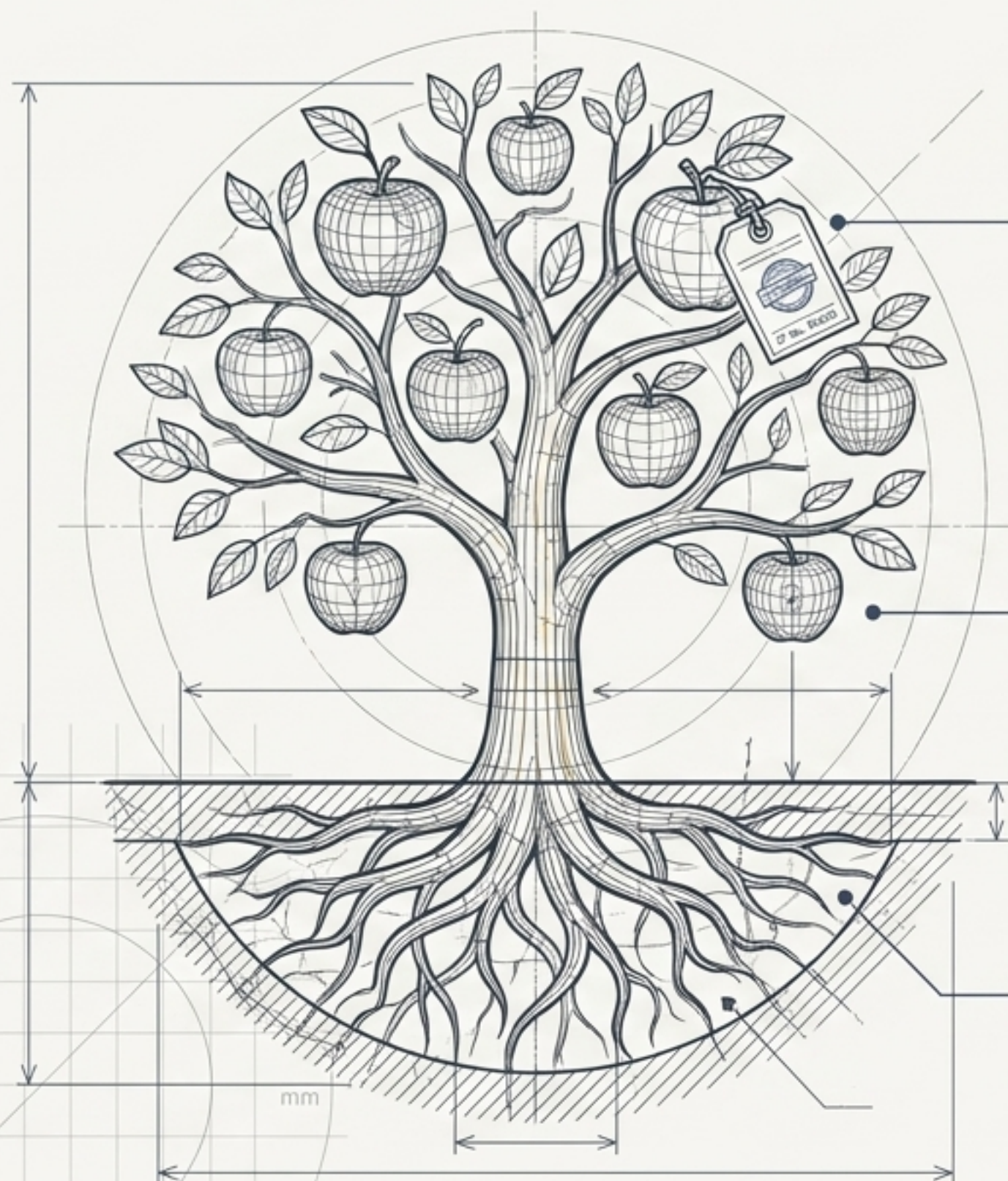
意匠は「出願・調査ツール」の
枠組みを抜け出し、経営層向け
の「無形資産アジェンダ」へ移
行しつつある。

ツール・実務レイヤー （停滞・周縁）

意匠検索・権利化ツール

意匠専用の目玉展示や新製品発表は両年とも
皆無。PatsnapやJPDS等の総合DBベンダーで
も、意匠はメイン機能としての訴求なし。

シフトの背景：意匠から「デザイン経営」への概念拡張



りんごのタグ (IP Rights):
知的財産権 (意匠権など)

木とりんご (Visible Assets):
可視化された知的財産
(製品・サービス)

土と根 (Invisible Assets):
可視化されていない知的資産
(組織文化、デザイン力)

「りんごのタグ (意匠権)」単体の議論から、「根と木 (デザイン経営全体)」をどう育てるかという議論へ PIFCの講演テーマが合致している。

出典: 特許庁『デザイン経営ハンドブック2～知的財産の根柢からみたデザイン経営～』(2026年7月公開)に基づく概念構築

インフラの地殻変動：画像検索技術の「コモディティ化」

INPIT「Graphic
Image Park (GrIP)」
終了

Date: 2026年12月28日 17時

終了の公式理由：「画像
検索サービスの普及」
と「利用の減少」。

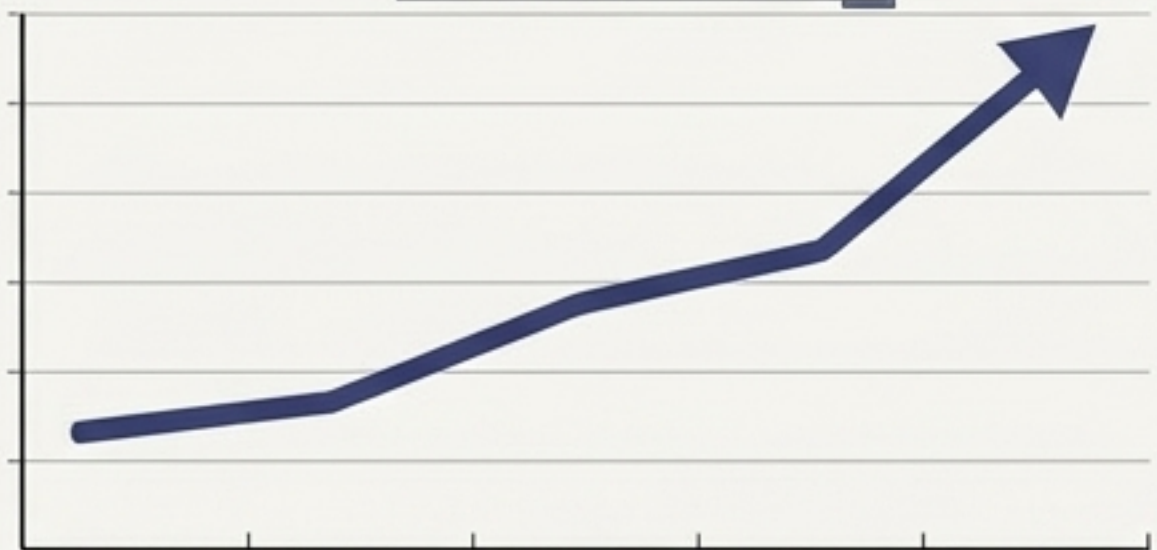
J-PlatPat等の標準機能へ
移行。

意匠の画像検索は既に
「当たり前」の機能とな
り、展示会で目玉として
打ち出しにくい成熟期
(コモディティ化) に達
した。これが新製品不
在の要因である。

市場のリアル：特許 vs 意匠の投資コントラスト

2025年 出願数：
358,317件
(前年比 +16.8%)

特許出願動向

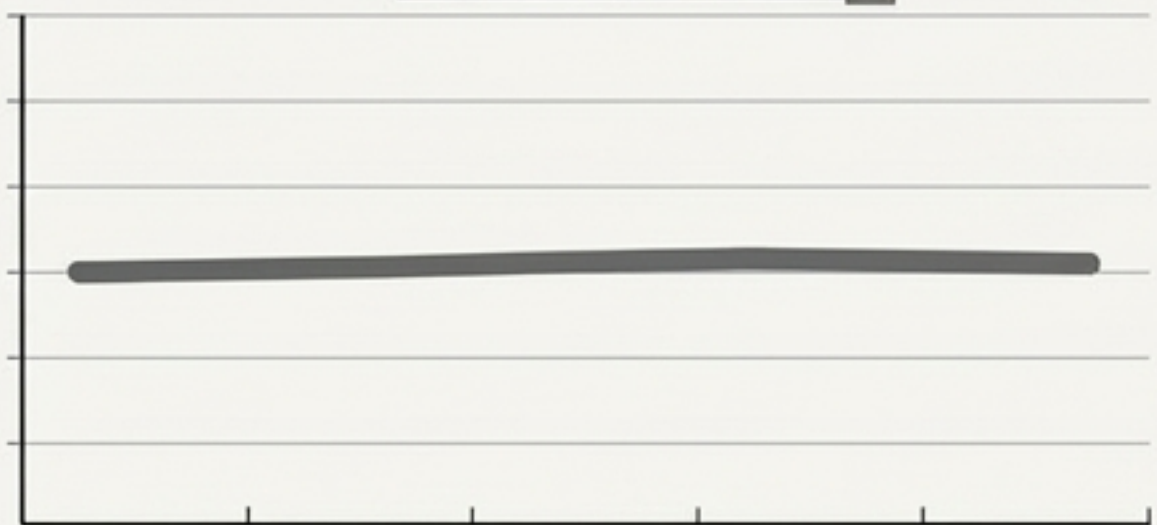


圧倒的なボリュームと成長。ベンダーが「生成AI×特許調査」へ開発・販促投資を集中させる強力な市場インセンティブ。

2025年 出願数：
31,853件
(横ばい)

内訳：国際意匠 5,274件 /
関連意匠 4,178件 (13.1%)

意匠出願動向



出願数がフラットであるため、新規の意匠専用ツールに対する市場の期待収益が低く、機能アップデートが停滞しやすい構造。

グローバル・ルールの再編：EU意匠制度改革の波



展示会のブース上では沈黙しているが、**UI・画像意匠、アニメーション、仮想空間** 関連の意匠実務に直結する変更。実務者が直面する「見えないデッドライン」。

SYNTHESIS：分離と進化を遂げる「意匠IP」の新たなパラダイム



意匠IPは「出願ツール競争」のステージを終え、上流の【経営戦略】と下流の【グローバル実務・AI標準化】へと機能が分離・進化している。PIFCの「意匠ブース不在と経営フォーラム増加」は、まさにこの過渡期を映す鏡である。

Actionable Insights：知財・デザイン部門がとるべき4つの行動



1. ツール調達戦略

PIFCの展示だけに依存しない。意匠専用機能は、各ベンダーの個別チャンネルやWIPO/EUIPO/INPITの公的DBの動向を直接トラッキングする。



3. 経営層への啓発

金谷勉氏の特別講演や「デザイン経営ハンドブック2」の内容を、自社の経営層・開発部門へ「無形資産アジェンダ」としてインプットする。



2. 実務インフラの移行 [Deadline: 2026年内]

GrIP終了（12/28）に向け、年内にJ-PlatPat等への業務移行を完了し、画像意匠の類似調査マニュアルを改訂する。



4. グローバル出願対応

EU意匠第2フェーズの適用に合わせ、UI、アニメーション、仮想空間デザインにおける欧州での保護範囲と手続方針を再評価する。

Future Checkpoints：意匠IPが「次のフェーズ」へ移行するシグナル

今後、以下のいずれかの事象が観測された時、意匠は再び市場の「独立した主役」として再浮上したと判断できる。

Signal 1: [Tech]

画像AIのネクスト・ブレイク

既存の類似検索を超えた、意匠専用の「生成・評価AIツール」が新製品として登場する。

Signal 2: [Volume]

議論のクリティカル・マス

意匠・デザインを明確な主題とする講演や出展者プレゼンが「計5本以上」の規模に拡大する。

Signal 3: [Authority]

政策と制度の直接介入

特許庁、WIPO、EUIPOが、総合知財ではなく「意匠制度」や「意匠DB」に特化した独立セッションを構える。

Appendix & Methodological Notes

Limitations (留保事項)

- PIFC 2026の公式プログラム全量（108テーマ）の網羅的確認は未了であり、出展者プレゼン内に意匠関連が含まれる可能性を残す。
- 2026年来場者数（15,502名）は速報値に基づく。

Key References

- 産経新聞社「第34回 / 第35回 知財・情報フェア&コンファレンス」開催リリース
- 特許庁『デザイン経営ハンドブック2～知的財産の視点からみたデザイン経営～』
- 特許庁『特許行政年次報告書 2026年版』
- INPIT「画像意匠公報検索支援ツール提供終了のお知らせ」
- EUIPO "EU Design Reform" Documentation